『バードウォッチング』を楽しもう！（日本野鳥の会・鹿児島）

NHK鹿児島放送局「ひるまえクルーズかごしま」「情報WAVEかごしま」で放送されました。

2020年12月2日（水）にNHK鹿児島放送局制作による『バードウォッチング』をテーマにした番組コーナーを、「ひるまえクルーズかごしま（11時45分）」「情報WAVEかごしま（6時10分）」で放送されました。日本野鳥の会・鹿児島代表の柳田一郎氏によるバードウォッチングの楽しさを、冬鳥を紹介しながら特徴・特性や観察場所（鹿児島県内）の情報を含めて紹介させてもらいました。

番組の冒頭にバードウォッチングで必要な双眼鏡やハンディー野鳥図鑑・記録ノートを持ち歩くことで、バードウォッチングがより楽しくなることからはじまった。

冬鳥をメインに番組を進めるにあたって、冬の季節にはシベリア、また北日本・北海道から越冬のために鹿児島県内に多くやってきていて、一年の中でいちばん野鳥の多い季節であることも付け加えた。

＊＊　思わず身につまされるカモ　＊＊

（番組内タイトル）

最初に登場したのはオナガガモ、今回は春のおもしろい求愛行動の紹介です。鹿児島県内の多くの河口域や水辺で観察できるオナガガモは、求愛のシーズンになると1羽のメスのまわりを数羽のオス達がクルクルと回りながら、餌を獲るときのように水中に顔を突っ込んで逆立ちしたり、立ち上がったりを繰り返しながらアピール（求愛ダンス）を続け、その後に1羽のメスとカップルが成立すると群れの中からスーッといなくなり、残ったオス達は興奮が治らずしばらくの間クルクルと回り続けていることが説明され、春の季節の鳥の観察の一つの楽しみ方とを紹介した。

＊＊　クロツラヘラサギ　＊＊

クロツラヘラサギについては、まず顔の部分が黒くて大きなスプーンのようなくちばしをした鳥で、世界的にも珍しく東アジアにのみ生息する絶滅危惧種であることの説明からはじまって、九州地方にその多くが越冬にやってきていて、鹿児島県内では姶良市の須崎調整池や鹿児島湾奥（北部）、そして南さつま市の万之瀬川河口で観察できることと大きなヘラのようなくちばしで、魚や甲殻類を主に食べていることも加えられた。

放送とは別の話になりますが、日本野鳥の会も全国的にクロツラヘラサギの飛来羽数調査を継続的に実施しており、今年も1月中旬に鹿児島県内の調査が実施され本部への報告がされる予定になっております。

＊＊　鳥界の甘党　ヒヨドリ　＊＊

（番組内タイトル）

タイトルの「鳥界の甘党」としてヒヨドリです。

留鳥でもあり年間を通して観察できる鳥なのですが、冬の季節は北の方から越冬のために多くのヒヨドリが鹿児島県内にもやって来ています。

冬場に実をつける柑橘類（ポンカン・タンカン）を好んで食べることが多いので「甘党」とタイトルにしましたが、甘党であるがゆえに農家の人にはあまり歓迎されない鳥であることも付け加えました。

またヒヨドリ（鳥名）の由来も『ヒーヨ・ヒーヨ』『ピーヨ・ピーヨ』と鳴くことから、一般的には変化して『ヒヨドリ』と呼ばれるようになったと説明した。

＊＊　渓流の宝石　カワセミ　＊＊

（番組内タイトル）

カワセミは漢字で『翡翠』と書き、水辺の宝石とされていることから話がはじまり、コバルトブルーの背中の魅力や鹿児島市内でも甲突川などで見ることができる事を紹介し、多くの方が見てみたい鳥に上げるカワセミは意外と身近なところにいると説明した。

番組キャスターの方も綺麗なカワセミがこんな近くにいて、また一年を通して見られることに、鳥探しが楽しくなりそうと語った。

＊＊　野鳥観察の心構え　＊＊

番組の最後に日本野鳥の会が野鳥観察の心構えとして提唱している**「やさしいきもち」**について紹介しました。

や・野外活動　無理なく楽しく
さ・採集は控えて自然はそのままに
し・静かにそーっと
い・一本道　道からはずれないで
き・気をつけよう　写真・給餌　人への迷惑
も・もって帰ろう　思い出とゴミ
ち・近づかないで　野鳥の巣

『やさしいきもち』の一つ一つを理解していただき、バードウォッチングに行かれる時の心構えにしていただきたいと伝えた。

また、近年は企業内でメンタルヘルス等の一環として、バードウオッチングが心の癒しやストレス解消・軽減につながっていることもあり、柳田代表より「心が安らぐ、そういう癒しにも繋がればと思っている」と締めくくった。

（写真・報告：原裕之）

～～　番組収録体験記　～～

10月30日金曜日午後12時過ぎ、NHK鹿児島放送局にいつものバードウオッチングの服装で出向き、早速最上階にあるスタジオに入りました。入った瞬間、目の前の窓に広がる桜島に息をのみました。ちょうどトビが同じ高さを飛び、いつもと違う目線の高さでその横顔を見ました。

打ち合わせ中には、ハヤブサらしき姿も見えました。

スタジオは思ったより広く４台のカメラと４台のモニター（だったかな。不正確）が目の前にあり、カンペ（シナリオ大書）も準備されていました。スタジオはもっと小さいと予想していたため、驚き緊張しました。しかし、担当の當麻（とうま）キャスターとバックアップの宮田キャスターのお二人の指導が的確で、かつ抜群に若くかわいらしく、正直だいぶ癒やされました。

さて、番組の広報にも努めました。フェイスブック、ライン、メール、関係の機関団体の皆様へのFAXでの告知など工夫をさせていただきました。それだけに会員の皆さんにご案内できなかったことは残念でした。視聴率向上による当会認知度向上のための工夫でしたけれど、放送が２回延期されて12月2日に放送されたこともあり、再三のやり直し広報となりました。

それだけに放送への反響も大きいでした。美しい写真（当誌の原編集長撮影）や愉快な標語（NHKさん発案）、イラストによる説明のわかりやすさ、「やさしいきもち」への共感、放送最後の延期中に発生した鳥インフルエンザへの対応のコメントなど、多くの方々に好感を持っていただいたようです。

当日昼の放送とともに、夕方のニュースでも放送があり、認知度はますます向上しました。ありがたいことでした。

（報告：柳田一郎）